

1. 盧溝橋事件からの 陸軍と海軍の動き

海軍の微妙な動き

7/7, 発生、盧溝橋事件勃発に際しての拡大派の先鋒**武藤章大佐**は「愉快なことが起こったね」と言い、不拡大派の柴山大佐は「厄介なことが起こった」と反応した。対立は下図表の通りである。



(図に補足説明 石原完爾は部長で武藤章は課長であることに注意)

7/8, 海軍は即座に「吳鎮守府(駐屯所) 第二特別陸戦隊」を隠密に編制。大隊編制で約500人の2個中隊、佐世保に送るの1ヶ月間市街で訓練しながら待機していた。

上海到着は8月11日。海軍のこのスタートダッシュの良さは何を意味するか？

7/8, 早朝東京の陸軍中央部が事件の報告を受け、閣議が開かれた。近衛首相は陸軍大臣の拡大提案を撤回させ「事件の拡大を防止するため、更に進んで兵力を行使することを避けるべし」と閣議決定した。

7／9、近衛首相は外相、陸相、海相の4相会議を開き「不拡大方針をとるが、中国が無反省ならば機宜の措置をとる」とし事件解決のための4条件を決定した。

①中国軍の盧溝橋からの撤退。②将来責任をもって再発を防止すること。③責任者の処罰④謝罪

現地で交渉していた今井武夫少佐は双方を調整して

「中国側が日本軍の要求を承認すれば、日本軍は調印と同時に盧溝橋周辺から自発的に撤退する」（条件付き不拡大方針）であった。中国側には屈辱的なものであったが、中国側は盧溝橋を日本に占領されたくなかったのが7月11日午後8時に協定に同意し局地解決に向かった。

7／10、ところが、一度後退した支那駐屯軍（日本軍）**牟田口連隊長**は10日朝から再び宛平県城に前進を命じた。すると午後4時頃、日本軍に向けて数発の小銃弾がぶち込まれてきた。その報告を受けた牟田口連隊長は「やっぱり敵は、協定を守るつもりはない」と強引に攻撃命令を出した。そこへ上司の河辺旅団長がやってきて、牟田口連隊長を睨み付け、長い睨み合いの末、旅団長は無言で戻った。ここでも既成事実と独断命令が承認された。部隊は命令に従って総攻撃をかけ宛平県城を奪取し、中国軍を完全撃破し、この瞬間が日中戦争の始まりとなった。

7／11、これを追認するかのように11日、近衛内閣の態度が一変した。

陸軍中央部では「拡大派」（中国一激論）が「不拡大派」を押さえ込み陸軍大臣杉山元が閣議開催を要求してきた。

閣議決定は「内地から3個師団、朝鮮から1個師団、満州から2個旅団の派兵を決定し朝鮮と満州の部隊に華北出動を命じる」「重大決意・挙国一致体制」政府声明が出された

政府は「盧溝橋事件」を「北支事変」（9月2日には「支那事変」日華事変）と呼称も決定した。こうして戦火は拡大し瞬く間に華北5省から全土に拡大していくことになる。

7／11、現地軍の間で停戦協定が成立していた。

7／11、海軍の動き、非常事態に備えるために、木更津航空隊・第12航空隊の2隊を「特設連合航空隊」として編制 **非常事態が起こることを想定済みの体制**

7／12、海軍「対支作戦計画内案」を策定、戦局拡大の場合は「空軍部隊の一斉なる急襲をもってなす。第一第二航空隊をもって杭州を、第一連合航空隊をもって

南昌、南京を空襲す。第二連合航空隊は当初北支方面に使用す。空中攻撃は敵航空勢力の覆滅を目途とす」（要約）既に具体的な戦術が示されている

海軍の方針は、日中関係の現状を打破するには、蒋介石の中央勢力を屈服させる以外に道はない。局地戦は期間を延ばすだけで、作戦困難となる危険性が大きいにある。故に作戦指導方針を「宗哲元の支那第29軍の膺懲」ではなく「支那膺懲」とする。更に中国の死命を制するには上海、南京を制することが最重要である。そのため必要な兵力は5個師団を要する。又開戦当初の空襲作戦の成否が難易遅速を左右するから、使用可能の全航空兵力をもってあたり、第二航空戦隊も当然加わる」（要約）

7/13、現地協定が結ばれた後も国民革命軍第29軍（中国軍）は大紅門で日本軍のトラックを爆破して4名を殺害（大紅門事件）7月14日、日本軍騎兵を殺害等小競り合いが続く。

7/17、蒋介石は11日の日本の政府声明に対して「吾らはただ徹底的犠牲あるのみ、徹底的抗戦あるのみ。ただ犠牲の決心をもつことによつてのみ初めて最後の勝利を博することができる」と「最後の関頭」を表し国民に忍耐と長期戦の覚悟を訴えた。

7/20、盧溝橋城から日本軍に射撃を加え、日本軍も応戦した。

7/25、夜、保定近くのランファン駅付近で両国の武力衝突が発生、事態は猶予を許されないと現地司令官が独断で天津から一連隊を急派して攻撃を命じた。28日正午迄に中国軍を北京から撤退しないと攻撃を開始するという最後通告をした

7/26、夕刻、広安門事件が起きる。

北京の居留民保護の為に日本軍広部大隊は26台のトラックで北京城内に向かった。広安門（北京城外門）の通過は事前に当局と交渉済みであったが、部隊の3分の2が通過したところで門が閉まり日本軍が城門内外に切断された。手榴弾と機関銃の攻撃があり応戦、豊台（日本軍駐屯地）から救援隊が派遣され、折衝し収束した。現地司令官は従来の不拡大方針を放棄し、28日から「北京から天津地方の中国軍膺懲」のため武力行使をすると決意し、東京の陸軍中央へ天皇の勅裁を仰いだ。

7/28、支那駐屯軍（日本陸軍）は南苑（現在は空港、北京中央から10数km）を攻撃し、盧溝橋南方をに進出した。通州の日本軍も応援に駆けつけたが、その留守を狙われ日本人居留民180名が殺戮されるという通州事件が起きた。（7/29）

通州事件は冀東密貿易にからむ複雑な民族的且つ経済的利害が原因であるが、真相は事変拡大の陰に隠されてしまった。(日本軍が武力で勝っても戦争の終結が出来なかった理由の一つが隠されている)

7/28, 海軍(軍令部と海軍省)は「時局処理及び準備に関する省部協議覚書」を決定

「事態不拡大、局地解決の方針は依然堅持するが、今後の情勢は対支那全面作戦になる機会が大きいので、海軍は対支那全面作戦に対する準備を行うことにする」(要約)

7/30, 30日迄に天津が支那駐屯軍(日本陸軍)によって占領され、8月8日に支那駐屯軍(日本陸軍)は北京に入城した。

蒋介石は「最後の関頭が来た。今後局地的解決の可能性はまったくない。国のために犠牲となる決心を持つように」全民衆に呼びかけた。

7/30、陸軍が海軍に示した作戦方針「作戦地域は概ね北京の南西150km。南東200kmの線以北とする。状況により一部の兵力をもって青島及び上海付近とする局地戦」(要約)であったが、海軍は内心せせら笑って「承認」し、天皇に奏上した。天皇も局地解決を望んでいた。

然し海軍を訪れた石原完爾は見抜いていた。「海軍はきっと上海で事を起こす。その場合、陸軍は派兵しない方針である。やむを得ない状況が起きても、居留民保護のため、せいぜい1, 2個師団の派遣に留める」

天皇の動きと船津和平交渉

7/30, 天皇は近衛首相に対して「盧溝橋付近(東北地方)を平定すれば、軍事をやめてよろしいのではないか」と意見を述べ、8/5首相に対し、8/6軍令部総長に対し、8/10参謀総長に対し、それぞれ外交交渉による時局収拾を望む意向を伝えている。こうした天皇の意向を受けて4相合意のもとで隠密離に和平工作が行われた。

8/6, 「日支国交全般的調整案要綱」が作成された。「盧溝橋事件が発生する原因となった関東軍と支那駐屯軍(日本軍)が強行した華北分離工作によって拡大した權益を大筋において清算し、日本は満州国の維持を最重要の条件とする、日本側の大きな譲歩」(要約)となっていた。

蒋介石も多くの国内問題を抱えていたので和平解決を望んでいた。両国政府が交渉のテーブルに着きうる案であった。

8／7， 和平工作の使者には民間人、在華日本紡績同業会総務理事の船津辰一郎が派遣された。成功するかにみえたが、これが成功しては困る組織があった。海軍である。

前年「南進論」を唱えた海軍は必然的仮想敵国はアメリカであると考え、航空戦で優勢体制をつくり出すために航空機の開発に力を注ぎ九六式の攻撃機や爆撃機が完成していた。それらの飛行機や操縦技術の実戦演習をしなければならなかった。特に九六式陸上攻撃機は艦上攻撃機より重い爆弾を搭載できるように設計されていた。その効用も実験したかった。南京を始とする中国の都市爆撃でデータを集め零戦闘機の開発に寄与したと言われている。

この辺りから日本の陸軍と海軍の動きが輻輳（ふくそう）するので、中国支配をめぐる陸軍と海軍の管轄区域を記す。陸軍の管轄区域は朝鮮半島を經由して鉄道を用いた軍と物資の輸送が可能な満蒙と華北5省で、揚子江流域を含む。海軍は艦隊を持ち上海を拠点とする長江流域の警備、華中と華南を管轄すると伝統的に棲み分けをしていた。

海軍の動きと大山勇夫第一中隊長事件

8／7， 上海海軍特別陸戦隊司令官から秘かに呼び出されていた26歳の青年がいた。大山勇夫第一中隊長であった。口頭秘密命令が言い渡された「お国のために死んでくれ、家族のことは面倒みるから、明後日夕刻、中国軍の飛行基地となっている虹橋飛行場へ強行突入して、射殺されてくれ。その際こちらから攻撃したと見られないように、拳銃は携帯するな」

密命を受けた大川勇夫中尉の行動

「夕食をすまして書類整理をしておられました。いらぬ書類は何時も焼いておけと言われていたのですが、あの日は自分で焼いておられました。終わると浴場に行き、腰上だけ拭っておられました。終わって外に出て手を腰にして空を眺めておられました。そして、自分の室へ帰られ襦袢と禪（ふんどし）をかえられた」（大山の護衛兵を務めた海軍一等兵）

大山は日記を書いていた。8月8日の最後の文章の頁に「遺髪」とお母さんが送った半紙大の絹布で作った千人針が半紙に包まれ挟みこまれており、表に「家人曰く忠義を尽くせ」と書いてあった。千人針はお守りである。お守りが「もう必要なくなりました」との意図が伺われる。

8／8， 第一連合航空隊鹿屋航空隊（鹿児島県）は台北基地に移動が命じられる

8／8，木更津海軍航空隊は「渡洋爆撃」準備のため全機大村基地に集合した。同日、蒋介石は「全將兵に告ぐ、我らは全国一致して起き上がり、侵略日本と生死をかけて戦わねばならない。我らには唯、徹底的犠牲あるのみ、徹底的抗戦あるのみ。犠牲の決心を持つことによつてのみ初めて最後の勝利を博することができるのである」。

8／9かくして大山勇夫第一中隊長射殺事件が起こる。忠実に命令どおりに部下の一等水兵齊藤与藏の運転する車で目的地に突入し射殺された。



地図補足説明* 右上の公太飛行場は後に日本軍機の発信基地となる。

8／10，軍令部は、「大山事件対処方針」と「時局処理方策」を決定する。軍令部は陸軍に一箇師団の上海派遣を閣議で提案するように要求する。海軍大臣米内光政はこの段階でも船津和平工作に期待を持っており、陸軍派兵決定を認めなかった。陸軍も陸軍の出兵は全面的対支那作戦の動機となるとして、再度、和平解決の促進を求めた。

8／11，海軍は中国側に大山事件の「要求事項」を提出する。

事件責任者の処刑、上海の中国軍防衛陣地の撤去、中国保安隊の縮小と駐屯地の制限等、とうてい中国側がのめない内容を突きつけ、これを受け入れて実行しなければ実力行使をするという上海戦を挑発する最後通牒又は宣戦布告に等しい内容であった

8／11、海軍、第3艦隊司令官長谷川清は、先制攻撃に備えて隠密偵察飛行を命令したが、杭州で発見され中国軍機に追跡された。この隠密偵察の不手際が14日の中国空軍機の先制攻撃の原因になった。

8／12、蒋介石から「承認することは不可能である」と拒否と同時に、戦闘準備の命令を発した

蒋介石の対日戦略は、中国単独では日本に勝利することはできないので「日中戦争を世界戦争へ発展させる」ことであった。それは日本軍を上海・南京を中心とした欧米列強の権益が錯綜する華中に侵攻させ、アメリカやイギリスの武力干渉を引き起こすか、ソ連の対日戦争発動を促すことであった。蒋介石はドイツ軍事顧問団の指導を受けて、上海地域から南京にかけて防衛陣地を構築、日本軍の主力をもっとも防衛態勢と防衛力の強固な上海・南京地域に引き寄せ消耗戦を強いて、日本の速戦速攻作戦を挫折させて長期持久戦に引きずりこむ戦略を考えであった。これは海軍の軍備拡大、特に航空兵力の拡充を目論んでいた海軍首脳の思惑と「一致」してしまった。

中国軍の第88師が動きだし、海軍第三艦隊司令官は陸軍の緊急派遣を要請した。船津辰一郎の和平交渉は一瞬にして吹っ飛んでしまった。

米内海軍大臣は船津和平交渉に期待を持ち「進行中の外交交渉が今日明日中にその成果が期待できると思われるから陸軍の派兵決定は待ちたい」と12日までは考えていたが、その夜、近衛首相を訪れ、杉山陸相、広田外相の参集を求め、緊急4相会議を開催させ、陸軍の上海派兵の方針を承認させた。

8／12、軍令部総長伏見宮から、①第三艦隊司令官は敵攻撃し来たらば上海居留民保護に必要な地域を確保すると共に機を失せず航空兵力を撃破すべし。②兵力の進出に関する制限を解除す海軍の思い通りの戦略になった。第二次上海事変の発動を命令。大山中尉と斉藤水兵の葬儀を挙行し「仇をうつ」という復讐心を煽って陸戦隊の戦意昂揚をはかった。更に

軍令部第一部長からもこの日、海軍第三艦隊長長谷川清に機密電報を打っている「敵攻撃し来たらば機を失せず敵航空兵力を撃破すべき。陸軍出兵は未決定なるも、出兵の場合は2個師団同時派兵のことに協定しあり、但し陸軍の前進攻撃行動開始は

概ね動員20日後なるにつけ、その間、海軍陸戦隊の戦闘はなるべく拡大せず、陸軍派兵を待つこと」（要約）

第2次上海事変の始まり

8／13、上海にて日本の海軍陸戦隊と中国軍第88師との間で戦闘が中国人街ザホクと日本人租界虹口の境界付近で戦闘開始され陸軍を派兵するように緊急要請がなされた。これをもって第2次上海事変が始まった。

海軍木更津航空隊（大村基地に待機・九六式陸上爆撃機）は夜半過ぎ即時待機命令があり、250kgの爆弾2発を積み込み準備を完了した。翌日は台風のため延期、向かう先は南京であった。

8／14、蒋介石は14日未明を期して上海で日本軍を総攻撃を執行することを命じた。ここで中国は全面的な抗日戦に突入するに至った。中国空軍は延べ40機が上海に停泊中の第三艦隊旗艦の「出雲」と上海特別陸戦隊本部へ先制攻撃をしてきた。これに呼応して軍令部は次の海軍声明を発表し攻撃命令を発した。

「本14日午前10時頃、支那飛行機10数機は、我が艦船、陸戦隊本部及び総領事館等に対して爆撃を加える不法を敢えてし、暴戾言語に絶す。帝国海軍は今日まで隠忍に隠忍を重ねて来たが、今や必要にして且つ有効なあらゆる手段を執らねばならない」（口語要約）

海軍は陸軍や政府に先んじて不拡大方針を放棄し「対支作戦計画案」（7月11日策定）の第2段作戦、即ち中国との全面戦争の作戦を発動した。

日本海軍は悪天候の中、計画されていた通り初めての「渡洋爆撃」を開始した。

初日は杭州・広徳・笕橋・喬司を空爆

「渡洋爆撃」とは日本の航空基地から爆撃機を離陸させて東シナ海上空を飛行して中国の都市を爆撃することである。戦艦からの発進ではない。長距離航続距離が可能で250kgの爆弾を2発搭載出来る破壊力の大きい新鋭機の開発により可能となった。新鋭機を九六陸上攻撃機と名づけ、「海の荒鷲」と言われた。

「九六」とは西暦1936年が大日本帝国皇国2596年であったので下二桁をとって「九六」とした。零戦のゼロは皇国2600年＝西暦1940年に製作されたことを意味する

。

海軍で強硬な不拡大主義であった米内光政海軍大臣が態度を一変させ「不拡大方針」を捨て、夜に緊急閣議を要請した。

8／15、午前1時半、近衛首相の政府声明

「支那軍の暴戾を膺懲し、もって南京政府の反省を促すため、今や断乎たる措置をとるのやむなきにいたれり」を發した（近衛第一声明）

「支那暴戾膺懲」が軍部の共通の目的となった。**これが目的となる**

この日、陸軍は第三師団と第十一師団よりなる上海派遣軍の「編組」した。（編成と言わない）司令官は予備役であった**松井石根大將**（東京裁判で死刑判決を受ける）当時59歳、大將の数が不足していたための現役復帰である。陸軍最長老の大將の誕生、彼には軍功をあげる最後のチャンスであった。彼の任務は上海戦に限定されていたが、赴任前から南京を攻略するという野心を隠さなかった。

海軍の渡洋爆撃が始まる。



8 / 15, 南京を爆撃したのは新鋭機は長崎の大村基地を発進して東シナ海を横断し、台風による悪天候であったが南京まで洋上約600kmを含む960kmを4時間で飛翔し、南京を空爆した。上海、南昌、杭州他3地点に及ぶ広範囲なものとなった。

8月の「渡洋爆撃」は延べ78地点内南京は7回、上海は10回、日本軍も出撃で大きな被害をだしている。

ポイントは南京が渡洋爆撃の主たる目標となったことである。空爆は前哨戦であり、続いて陸軍の攻撃が始まる。このことを予想出来た人は多くはなかった。

この日、南京は最初の「渡洋爆撃」を受け市民は混乱した。

被害を受けた南京の金陵大学付属病院である鼓舞病院のウィルソンの記録から

「この日、診療から帰り自家用車の中で、市民が防空壕に逃げ込むのを見て、最初の空襲に気づいた。家に戻った彼は、日本軍機2機が自宅の上空を飛んでいったのを目撃している。午後になっても空襲警報は何度か繰り返し発令され、市民の気持ちを不安にさせた。この日城内にある民間機用の飛行場と城外にある軍用の飛行場の周辺が爆撃され、司法院の建物には飛行機から機銃掃射がくわえられた。このため数人の負傷者が出て、彼の勤める大学病院にベッドの空きがあるか問い合わせがきた。中略

8月15日から月末までに23回の南京空襲が行われたが、その多くが夜間空襲であった。夕食後の黄昏時、真夜中の12時、深い眠りに入ろうとする午前2時、更に未明の4時と時間を選ばず来襲する日本軍機の爆撃に南京市民の眠りは奪われた。中略夜間空襲の恐怖は日本軍が毒ガス弾を投下することへの恐れであった。毒ガス弾投下を懸念して、空襲警報の発令とともに窓を閉め切らなければならなかった。南京の夏は内陸気候で蒸し風呂のように暑かった。時には40度を越える熱帯夜でも、空襲警報が解除されるまで、窓を閉めておかなければならなかった。(在留のアメリカ人には防護マスクが配られていた)

19日は深夜に空襲があり、12名が死亡、多数の負傷者がウィルソン医師の病院に運ばれた来た

26日は夜中の12時に大規模な爆撃で、貧民街にも爆弾が落とされ、市内3カ所で火災が発生、およそ100人の住民が死亡した。殆ど連日のように日本軍の空襲に脅かされるようになると、南京住民の南京脱出が始まった。先ずアメリカ人イギリス人などの外国人が何百人と南京から避難した。8月末迄に富裕な家庭の人々が遠く親戚などを頼って南京から避難した。残留したのは行き場がない比較的貧しい人々と政府関係の公務の都合で離れられない人々であった。8月26日駐華イギリス大使の車が英国旗を掲げて走行中、数機の日本軍機から機銃掃射をあび、大使が重傷を負った。外国人をいえども日本軍の攻撃からは安全でないことがわかると、アメリカ大使館は全てのアメリカ人に南京を離れるように通達を出した。8月29日南京駐在の米・英・独・仏・伊の5ヶ国外交代表が共同して、日本が宣戦布告なしで中国の首

都を爆撃し、非戦闘員を殺害したことは人間性と国際道義にもとるものであるとして抗議し爆撃行為の停止を日本政府に要求した」

8 / 2 1、蒋介石は中ソ不可侵条約を調印してソ連と同盟関係を結び、軍機、武器の支援が始まる（カーチスホーク）

8 / 2 2、中国共産党の紅軍を国民政府の国民革命軍第八路軍に改編、第二次国共合作が成立し、抗日民族統一戦線が成立

上海で陸上戦闘が始まる

8 / 2 3、松井石根大将を司令官とする上海派遣軍の2個師団が上陸に成功するが、上海派遣軍には精鋭を送らないという方針であったので殆どが予備兵（期間は陸軍5年4ヶ月、海軍は4年）と後備役兵（予備兵終了して10年間）であり、兵士としては比較的高年齢者で家族を持ち職業も持ち一般的な家庭生活を営んでいた者を再徴集した軍で編制とは言わず「編組」と呼んだ。戦果は上がりず苦戦が続く

8 / 3 1、松井大将は参謀本部に増派を要求せねばならないほど中国軍は強く、堅い要塞がドイツの軍事顧問団によって指導され建造されていた。（石原完爾の予想通りであった）

9 / 2、日本政府は「北支事変」を「支那事変」と改称する。戦域は中国全土に拡大される。軍備費は増加する。（日華事変ともいう）

9 / 4 第72帝国議会で海軍の要求通り多額の航空戦力予算を承認、天皇も対中国宣戦布告の勅語発する。

日本海軍は上海市の東郊外の公大飛行場を整備して長さ700m幅200mの小さな飛行場が完成し、「渡洋爆撃」に代えて戦闘機の護衛をつけた九六陸上戦闘機を発進する本格的な爆撃部隊の出陣が可能となった。

9 / 7、陸軍、武藤章作戦課長ら拡大派は大部隊の上海派遣を参謀本部に決定させ、華北から後備歩兵10大隊を上海に向かわせた。更に9 / 1 1 第九、第十三、第101師団及び有力砲兵部隊を上海に派遣することを決定させた。陸軍参謀本部の作戦の重点も華北から華中へと移行した。（不拡大を主張していた石原完爾は更迭左遷された）増援を得たにもかかわらず戦線はなお膠着し苦戦が続いた。

9 / 11、国民精神総動員運動の実施

苦戦と長期化する支那事変に対処するため近衛内閣は本格的な戦時動員体制を目的とし「尽忠報国の精神を振起して」「拳国聖戦に立ち向かう」ために国民に訴えた。政府主催の大演説会に日比谷公会堂に5000人の聴衆が集まった。

三つのスローガン「八紘一字」「拳国一致」「堅忍持久」、戦争の長期化に対する国民の心構えと社会不満の一掃に努めた。「欲しがりません勝つまでは」「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」「遂げよ聖戦、興せ東亜」「聖戦だ。己を殺して、国を生かせ」「進め一億火の玉だ」「石油の一滴、血の一滴」「全てを戦争へ」が戦時標語となった。翌年の国民総動員法に繋がる。

9 / 19、日本海軍は艦上戦闘機による南京空襲を再開した。

この日第三艦隊司令官長谷川清は第三国人の南京退去を勧告し、翌日には上海総領事をおして、市民に南京市街より避難することを勧告する宣言を発表したが、これは無差別攻撃の通告であった。19日から25日にかけて11回延べ289機が出撃しておこなわれた南京空襲はいっそう悲惨なものとなった。それは「戦略爆撃」であり飛行場、政府の建物、中央大学、中央病院、放送局、鉄道駅、水道局、電力発電所、更に新市街の人口密集地も爆撃された。非戦闘員を含む無差別攻撃となった。もっともひどかったのは25日で5回の波状攻撃で爆弾約500個が投下され、市民の死者数百人、負傷者数千人という大被害であった。城壁の北側、長江岸の下関

(シャーカン)にあった難民収容所にも爆弾が投下され、100名以上の死者がでた。難民収容所には上海攻略戦のため、住む家を戦場とされた人々が戦火を逃れ、難民となって生活をしていた。上海地域の戦闘が日ごとに激しくなるにつれ南京には一日千人単位の難民の群れがたどり着くようになっていた。そして、同じく千人の単位の難民の群れが南京から移動していった。国立中央の屋上には赤十字のマークと漢字で「中央病院」と書いてあったが攻撃され、20個近くの爆弾が投下され、電気工一人が死亡、職員5人が負傷した。

南京空襲と同じように都市爆撃は10月中旬までに華中・華南の大中小都市60カ所に及んだ。

トラウトマン和平工作依頼

10 / 1、戦局が激しくなるなか政府にも早期停戦の動きはあった。首相、外務大臣、陸軍大臣、海軍大臣の4相は「支那事変対処要綱」を決定し停戦条件と国交調整方針を策定した。内容はほぼ船津和平の内容である。時期を見て第三国の公正な和平斡旋を受諾する方針であった。石原完爾は左遷直前であったが某中佐が「今度支那の大使に着任したトラウトマンはベルリンで補佐官をしていた時代の友人であ

る」と言ったのを聞いて「それは願ってもない。すぐに支那に行ってトラウトマンに会い、日支和平工作の手がかりを作ってくれ」と依頼し中佐を支那に行かせた。10月27日広田弘毅外相より米・英・独・仏・伊に対して日支交渉のための第三国の好意的斡旋を受諾する用意のあることを伝えた。トラウトマンはその後熱心な和平工作に尽力した。蒋介石の心も揺れ和平への期待もしていた。然し現場は毎日戦闘が続く

激しさを増す空爆

10/9、陸軍は第10軍3個師団（第6、第18、第114師団）からなる第10軍を編成し、更に華北から第16師団を上海派遣軍に加えた。

10/12、10月に入ると南京の空襲は更に激しさをました。この日は56回目の空襲があり、日本軍機も4機撃墜された。上海戦からウィルソンの病院に運ばれた来た負傷兵の中に毒ガス・イペリットの負傷者がいた。

10/19、70回目の空襲がある。長江のフェリーボート埠頭と対岸の浦口駅が爆撃され、近くの聖公会の教会が負傷者を収容し臨時の治療をおこなった。市内の飛行場付近に20発以上の爆弾が投下された。

10/26、午後に80回目の空襲がある。市内の飛行場にしこたま爆弾が投下され、まるで月面のクレーターのようだ。上海戦域から一日千人規模で護送されてくる負傷兵の問題が深刻化。大学病院では50人の負傷兵を収容・治療するのが精一杯である。

こうして南京空襲の日々は12月12日の南京陥落の日までまる4ヶ月続いた。

10月末になっても勝敗は決しなかった。中国は延べ70余個師、中国軍の3分の1の当たる70万人の兵力を投入した。戦死はは25万人と言われている。日本も19万人大兵力をつぎこみ、戦死傷者43672人に達した。

日本陸軍の増強と中支那方面軍の編合

11/5、日本軍は第10軍を杭州湾に上陸させ、上海防衛の中国軍の背後を衝かせた。背後を襲われた中国軍に動揺が走り、撤退と潰走が始まり、やがて総崩れとなった。ここで上海攻略戦は一段落ついた。

上海でも空中戦は行われ中国の戦闘機（米国製・ソ連製）は日本の予想を上回る性能と操縦技能で日本の新鋭機も同じように被害を受けたが、日本軍は上海で戦闘行為をしながら南京を攻撃し、更に他の都市爆撃をするという戦争を続けていた。華北

では関東軍が華北5省を支配下に治めていった。戦争というものは始まってしまふと受ける被害、与える被害を考えずに負けるまで戦うものであることが分かる。

11/7、上海派遣軍（4個師団半）と第10軍団（2個師団半）とを合わせて指揮をするために中支那方面軍の「編合」が発令された。司令官松井大将が兼任することとなった。

編合とは仮の編成という意味で、一時的な編成である。（上海派遣軍の時は編組と表現）任務も「上海付近の敵の掃滅」と限定されていた。その理由はこの軍には兵站機関も軍隊の軍紀風紀を取り締まる正式機関としての法務部も無かったからである。然し、ここで注目すべきは参謀副長に武藤章大佐が就任していることである。武藤章大佐（東京裁判で死刑の判決）は松井石根大将と組して南京攻略に向かう独断専行を参謀本部に追認させることであった。武藤大佐の身分は当時まだ参謀本部にあって出向して参謀副長になっていたのも、参謀本部に無理が言える地位にあった。

{私見}

中支那方面軍の編合という措置は南京陸上戦に備え上海派遣軍を吸収するための手段であり、不拡大派がどんなに反対しても南京攻略が陸軍の目的であったと私は考えます。又海軍による渡洋爆撃が毎日のように行われ華中・華南の主要都市が爆撃を受け、中国の市民に莫大な被害が出ていることも海軍からの報告で知っていた故に、航空機による戦略爆撃の後に陸軍の上陸作戦を加え敵を殲滅するという日本軍全体の統一した目的を完遂するために自信をもって独断専行したものと考えます。陸軍のある部分と海軍のある部分は隠密裏につながっていたように感じます。詳細は次号に山本五十六と航空隊で記す予定です

上海戦の終末と軍紀の乱れ

11/9、上海戦はほぼ戦闘が終わり中国軍兵士が退去し始めた。上海への最後の「渡洋爆撃」も11/16となっている。日本軍は11月中旬には上海全域を制圧し、上海派遣軍の本来の任務は終わった。心身ともに消耗、疲弊、疲労困憊した兵士たちは本国へ「凱旋」できるはずであった。2度も徴用され戦地に赴いていた兵士の故郷への思いはいかばかりであったでしょう。

陸軍中央には上海派遣軍を帰さねばならない問題を抱えていた。

それは軍紀の著しい退廃、志気の低下、軍紀の弛緩、不法行為の激発が深刻な問題になっていた。原因も明らかに分かっていた。

「軍紀の退廃の根元は、召集兵にある」とした所見が軍事課長名で発せられている。南京虐殺事件が起こるべくして起こった所以が明記されている

①将兵の資質の問題。志気の低下と軍紀の弛緩は高年齢者の多い予備後備役兵中心の部隊であること。彼らを統率する士官が若いこと、即ち指揮官としての資質の能力に劣る故に部下の統率ができなかつたこと

②兵站機関が弱く、食糧・軍事物資を供給・補充する後方機関が著しく劣悪であったこと。日本軍の伝統的な戦いは「食糧現地調達」「糧食を敵中に求む」であるから、行軍していく村々で食糧を求めなければならない。然し現地通貨は渡されず軍票で村人と交渉せねばならない。抗日運動が激しさを増す中軍票では話合いはつかない。従って多くが住民からの徴発と略奪となった。略奪のついでに婦女子が見つかるかと陵辱することもあった。陵辱は厳罰であったので証拠隠滅のため殺害した。野営設備も持たないため夜は民家で泊まる以外には方法がない。自分たちが寝るために住民を追い出さなくてはならない。物資購入が挑発化し、略奪化し暴行に転化した。

華北から上海に派遣された師団では当然に為されていた行為である。

陸軍中央もこのように軍紀紊乱した上海派遣軍を南京（上海・南京間は300kmある。幾つの村や町が存在したであろう）に向かわせる危険性を熟知して、国内帰還を痛感していたようである。この場合には退役軍人であった松井石根大将も召還対象となった。ここで陸軍中央が松井石根大将に忖度したのか、交渉して聞き入れられなかったのかは分からないが、松井＝武藤ラインの考えによって上海派遣軍は帰還できなくなり、南京に向かうことになる。（松井、武藤ともに東京裁判で死刑）

南京へ進軍が始まる

11/15、第110軍は幕僚会議を開き軍主力をもって独断南京追撃を敢行すると決定した。

これは制令戦を設定して奥地に侵攻することを禁じた軍中央からの命令違反である。

11/15、中国蒋介石は国防最高会議を開き首都の遷都と南京防衛のありかたを検討した。

蒋介石は上海戦を重視して総兵力の3分の1にあたる約70万人の精鋭部隊を投入し戦死者25万人前後という膨大な損失を出した。南京を防衛する困難さを覚悟して、更に長期戦とすることを決定した。蒋介石はトラウトマン和平工作に期待をかけながら、南京城の周囲を2重3重に張り巡らす「複廓陣地」工事を命じ準備に入った。南京外圍陣地を固めるために上海戦から退去中の満身創痍の部隊を緊急移動させた。これだけでは不十分であったので農村から急遽大量の青年壮年者を徴用して新兵として配備した。

11/17、中支那方面軍は進出制令戦線を突破し、上海から総退去する中国軍を追って南京への進撃を開始した。参謀本部は作戦地域「逸脱」を注意したが「事変

解決を速やかならしむるため、現在の敵の頽廢に乗じて南京を攻略するを要す」「首都南京を攻略しその心臓に迫る」ことによって「中支方面軍に明瞭なる作戦の終末を結ぶを可とする」意見を具申し、参謀本部の進出制令戦線の撤廢を認めるよう要請した。

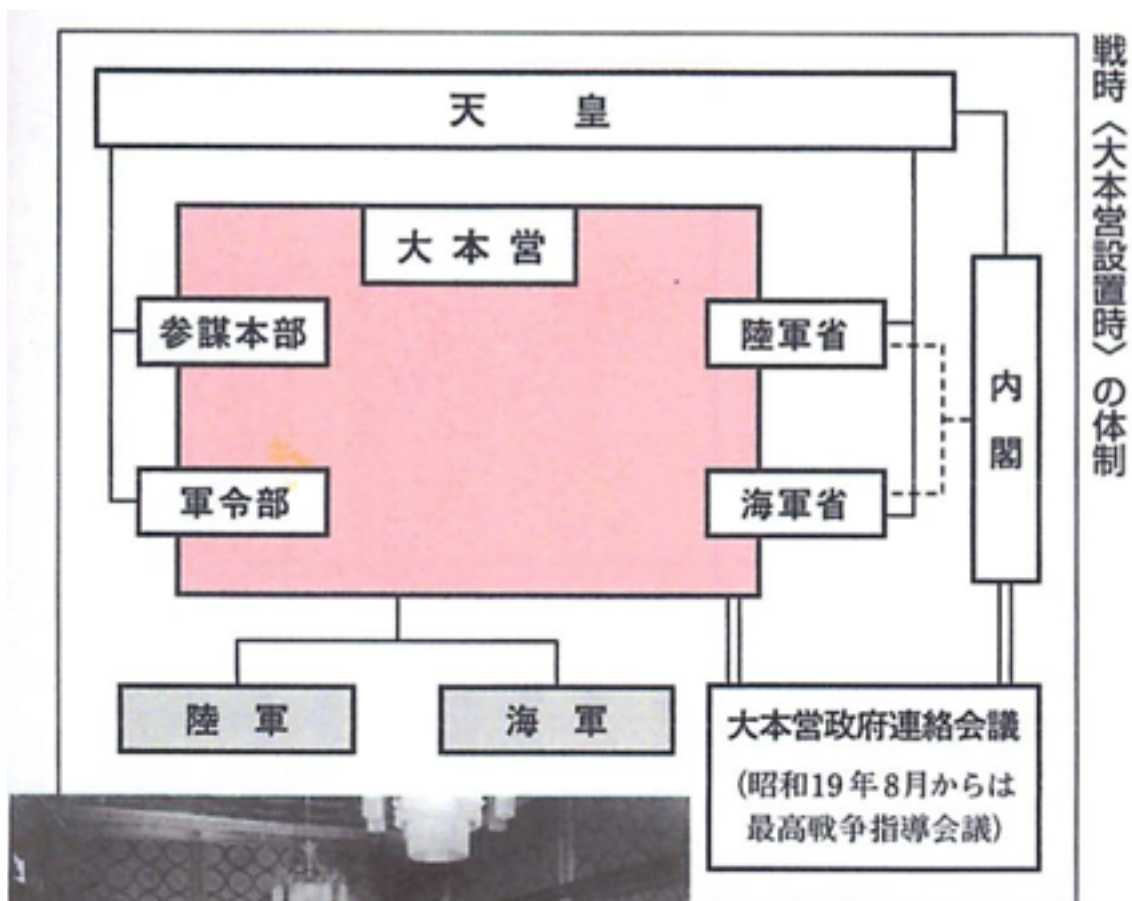
11/19、中支那方面軍は進出制令線を突破して、総退陣する中国軍を追って南京への進撃を開始した。

11/20、第10軍から「全力をもって南京に向かってする追撃する」と意思表示があったが本部は許可しなかった。

中国は重慶遷都 日本は大本營を設置

11/20 蒋介石は首都を南京から奥地の重慶へ遷都することを決定。日本の海軍の戦略爆撃が影響を与えたと言われる。長期戦に備える

11/20 日本、大本營を設置＝天皇に直結する最高戦争指導機関、参謀本部、陸軍省、海軍省、の最高首脳が出席した。（大本營構成図参照）



天皇臨席のもと開かれた大本營の最高戦争指導会議（昭和12年）。列席者の左奥は海軍の軍令部総長・伏見宮博恭王、右奥は陸軍の参謀総長・閑院宮載仁親王。

決着が付かない責任をとらないシステムが出来た。

陸軍は参謀本部の命令を無視する行動をとる、海軍は毎日のように各地に「渡洋爆撃」を行う等戦場ではそれぞれがそれぞれおれの思惑によって「暴戻膺懲」を目的に戦い向かう。本部機能が麻痺してしまったのであろうか？天皇を担ぎ出して大本営を組織したのであろうか？輔弼や帷幄上奏ではまだるっこかったのだろうか？

天皇の臨席のもとに参謀本部、陸軍省、海軍省の最高首脳部が出席して第1回大本営御前会議が開かれた。ここでの参謀本部の拡大派下村第一部長から「兵站・輜重・砲兵（の不足）から南京攻略は無理である」との公式見解を発表した後で「方面軍は海軍航空兵力と協力して南京その他の要地を爆撃し、かつ絶えず進撃の氣勢を示し敵の戦意を消磨せしむることを考えている」と無断発言（上司が反対する意見、下村の本音）がなされた。

対立しているようであった陸軍の拡大派と海軍の拡大派との内密な連携が明らかになり、8月15日より毎日行われている海軍航空隊の爆撃が陸軍の南京等の攻略の前哨戦の意味をもっていることが露呈した。然し批判や反対はされていない。会議の雰囲気天皇を「その気にする」のが狙いであったかも知れない。会議の後で下村部長は上司から無断発言を叱責されている。軍部の責任逃れと天皇の臨席にはなにがしかの関係があるのが日本の政治の特徴である。

11/24、今度は中支那方面軍からも「事変解決を速やかならしむるため、現在の敵の頽勢に乗じ、南京を攻略するを要する」という意見書が参謀本部に届いたが本部はこれも制した。

11/26、武藤は第16師団参謀長を南京進撃をけしかける手紙を書いて唆している。

11/27、中支那方面軍参謀長宛てに「作戦部においては南京攻略を実行する固き決意の下に着々審議中なり。未だ決裁を得るにまでにはいたらざるも、とりあえずお含みまで」下村部長は連絡をしている。見えない武藤大佐の隠れた策謀が随所に見られるやりとりが続いている

武藤大佐は疲弊していた上海派遣軍を挑発して、第10軍と「南京一番乗り」を競争させる戦術をとった。

この策は功を奏し第16師団（上海派遣軍に所属）の憤慨と苛立ちと怒りを中国軍への敵愾心のかたちとなって爆発させた。ここに不幸にして南京虐殺事件の主役を果たすことになった。

2. 大本営、南京攻略を命ずる

12/1、大本営は「中支那方面軍司令官は、海軍と協同して敵国首都南京を攻略すべし」との命令を下して、中支那方面軍の独断専行を又もや正式に追認した。又正規軍に昇格し上海派遣軍司令官に皇族の朝香宮鳩彦王中将が任命された。松井司令官は兼任を解かれ中支那方面軍の司令官専属となった。但し軍の資質は変わらず兵站機関を持たない軍である

「それは御者が、馬の飼い葉の世話をせず、手綱も握らず、疲れた馬に鞭だけをあびせて暴走させている」のに似ていると言われ南京事件の潜在は備わっていた。

12/2、蒋介石から駐華ドイツ大使トラウトマンに日本側の和平条件を認める意向を伝えてきた。然し、南京陥落間近しという興奮にかられた近衛内閣の閣僚たちは、日本側から要請したにも拘わらずトラウトマン和平工作をないがしろにし始めた（和平工作は10月から始まっていた）

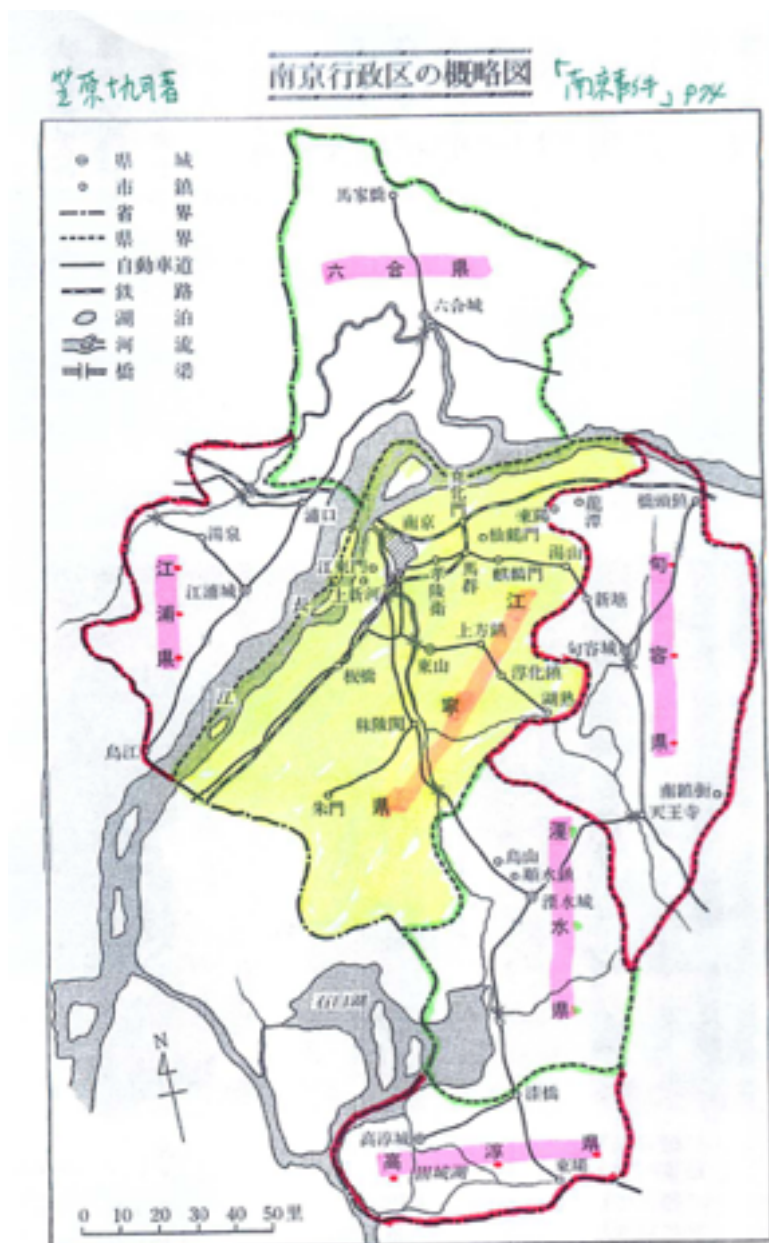
12/4、北京で中華民国臨時政府（日本の傀儡政府）が樹立された。華北では関東軍が華北5省を手中に治めていた

南京特別市と南京城内

攻略の対象となった南京特別市は南京城内とその周辺の地域6県（南京外圍防禦陣地線）からなっていた。その面積は日本の東京都と埼玉県と神奈川県を合わせた広さである。

（右地図参照）

南京城内の面積は東京の山手線内の広さである。全長



34kmの城壁で16の門をもつ高さ20mの堅固な城壁は現在もほぼ原型を留めている
南京事件は南京城外周辺地域から始まっているが事件の終結迄は次の段階に分けられる（私見＝本稿のまとめ方）

- (1)周辺6県から始まって南京城内に入るまで近郊農村部で起こった事件
- (2)南京城に入って12月17日松井大将の入場式まで南京城内外で起こった事件
- (3)12月18日から終結までの事件

南京攻撃は8月15日の海軍の「渡洋爆撃」で既に始まっており「戦略爆撃理論」が実証されている。「空軍で攻撃し、地上で攻略する。空軍は先制奇襲で敵の航空兵力と施設（格納庫）を破壊、次に制空権を奪い、戦略爆撃を連続敢行し、敵の戦意を消磨させて、最後に陸から全面攻撃をかけ攻略・占拠するという段階をおった戦略をとった。

(1)周辺6県から始まって南京城内に入るまで 近郊農村部で起こった事件

大本營の正式命令が出る前（12月1日）独断専行で攻めた地域は句容県であった。ここは有名な倪塘村があるところ（12月4日事件）だが既に11/22から被害が出ている。南京へは17日に日本軍が向かっている（既述のとおり）

以下は日本の歩兵第20連隊の牧原信夫上等兵の陣中日記から引用

11/22、道路上には支那兵の死体、民衆及び婦人の死体が見るのも辛い様子であった。橋の付近には5-6個の支那軍の死体が焼かれたり、首をはねられて倒れている。話しでは砲兵隊の将校がためし切りをやったそうである。

11/26、午後4時、第2大隊は喚声をあげ勇ましく敵陣地に突撃し、敵第一線を奪取。住民は家を焼かれ、逃げるに道なく、失心状態で右往左往しているのもまったく可哀想だが仕方が無い午後6時完全に占領する。（中略）付近部落の掃討が行われた。惨敗兵4名のうち3名を捕らえ、兵隊達は早速エンピ（小型シャベル）や十字鍬で叩き殺し、1名は本部に連行、通訳が調べた後銃殺した。8時半宿舎に着く。3小隊はさっそく豚を殺していた。全く素早くやるのには恐れ入った

11/27、休憩中に家に隠れていた敗残兵を殴り殺す。支那人2名を連れて11時、出発すーー休憩中に5-6軒の藁葺きの家を焼いた。炎は天高く燃え上がり、気持ちがいせいでした。

11/28, 午前11時大隊長の命令により6名、小銃を持ち、残敵の掃討に行く。Hは船で逃げる5-6名を発見、照準をつけ、1名射殺。掃討は既にこの時から始まったのである。自分たちが前進するにつれ支那人の若い者が先を競って逃げていく。逃げる者は怪しいとみて射殺する。部落の12-13家に付け火すると、たちまち火は全村を包み、全く火の海である。老人が2-3人いて可哀想だったが命令だから仕方がない。次、次と3部落を全焼さす。そのうえ5-6名を射殺する。意気揚々とあがる。

11/29, 武進は抗日、排日の根拠地であるため全町掃討し、老若男女を問わず全員銃殺す。

日記は続くが気分が悪くなるのでここまでとする。

この日記は検閲を覚悟で書かれているので、加害者の都合で書かれている。

おそらくこの筆者は11/17に上海を出発した上海派遣軍の一人であると推定する。

南京近郊の6県には150万人の人が住んでいた。南京攻略が始まってでも避難することもなく、前触れも無く波状的に侵攻してくる日本軍に苦しめられた。日本軍は兵站機関を持たないので糧食を現地調達＝食糧挑発と略奪が日常的になっていた。

南京攻略戦は上海戦から撤退してゆく中国軍の追撃殲滅と、南京防衛軍に対する包囲殲滅戦という戦法をとった。投降兵、敗残兵、捕虜であろうとも、中国兵であったと思われる者は皆殺しにされた。戦争の目的が「暴支膺懲」であったためその思想は末端まで浸透して、自分たちは皇軍であり、戦いは聖戦と教育された兵士達は討ち懲らしめることに快感さえ覚えている。

11/29、溧水に中国軍総司令部があるという情報を得て、海軍航空隊の戦闘機・爆撃機36機が市街を爆撃、突然の空襲で街は地獄絵と化した。市民1200余名が死亡家屋数千軒が破壊された。海軍の航空隊は陸軍の第10軍及び上海派遣軍の陸上作戦に協力して、南京への途上にある常州、丹陽、鎮江などの無防備都市の市街を爆撃したり、敗走する中国軍密集部隊への機銃掃射、撤退部隊を乗せたジャンク群の爆撃、駅や貨車や鉄道などの輸送交通手段の爆撃・破壊など、さまざまな作戦を展開した（海軍の陸上戦闘協力）

12/3、海軍航空隊は南京の東南130kmの常州に前進基地を開設、多くの飛行機を移駐させた。空爆が更に容易にできるようになった。

12/4、句容県の倪塘村（南京から約50km）に日本軍第16師団が侵攻、翌朝にかけて殺・略・姦のあらゆる暴力がなされた。村民約80名を捕縛して句容公路沿いに連行し、機関銃で全員射殺した。村を去る前に村落に放火したため全村焼失した。ため池の土手で一人の若い女性が8名の日本兵に輪姦され、その後精神に異常をきたし間もなく死亡した。40名が醸造小屋に押し込められ火を付けられた。小屋の外に逃げ出した者は射殺された。生き残ったのが16歳の少年一人であった。これが南京選区における戦闘の開始であった。

日本軍の兵力は陸から20万の兵が波状進軍の形で攻囲し、空からは支那方面艦隊と航空部隊の第1空襲部隊が交互に出撃して激しく爆撃を加え、長江からは遡江部隊が南京に向かって兩岸の要塞・砲台を攻撃しながら進撃しはじめた。まさに陸と空と河から徹底した包囲殲滅戦が開始された。

中国の南京軍は15万人、住民は近郊6県には100万人以上、南京城内には40～50万人の市民と難民がいたと言われている。

12/6 前線部隊は南京城「複廓陣地」（中国軍が2重3重に防衛している城壁近く）に向かった進撃を開始。海軍は12/3に常州（南京と上海の間、南京から約150km）に前進基地を完成し多くの戦闘機を終結して、連日南京城内に爆撃を加えた。

蒋介石の脱出

12/6、蒋介石は部下の勧めで南京を脱出、後の指揮を唐生智司令官に委ねた。数日中に国民政府の軍政の要人、南京市長を始とする南京市政府の要人もすべて南京を脱出した。

(2)南京城に入って12月17日松井大将の入場式まで 南京城内外で起こった事件

南京城内の戦い

①日本側の対応

蒋介石の脱出は敗北を示すものであった。日本軍は南京陥落も目前と考えて中支那方面軍司令部は「南京城の攻略及び入城に関する注意事項」を下達した。

内容は、城内には一部の軍紀厳正な選抜された部隊だけを入れることが明記されていた。この注意事項が守られていれば南京事件は起こらなかったはずである。

「皇軍が外国の首都に入城するのは有史以来の盛事であり、長く歴史に残る事績であり、世界がひとしく注目している大事件であることを鑑み、清々堂々、将来の模範たるべき心構えを持って入り、各部隊の乱入、友軍の相撃、不法行為等など絶対にあってはならない」「入城部隊は師団長が特に選抜した者、あらかじめ注意事項、特に城内外国人権益の位置等を徹底せしめ、絶対に過誤なきを期す。」

「部隊の軍紀風紀を特に厳粛にし、支那軍民をして、皇軍の威風に敬仰帰服せしめ、苟も名誉を毀損するような行為の絶無を期す」「奪略行為をなし、又は不注意といども火を放つ者は、厳罰に処す。軍隊を同時に多数の憲兵、補助憲兵を入城させ、不法行為を摘発する」

近代戦において、軍隊が一般市民の居住する都市を攻略・占領する場合は、非戦闘員への危害が加えられるのを防止するため、進駐兵力を制限したりして、戦場で「殺戮者」「殺人鬼」と化したままの武装兵士を一般市民の接触を減らし、不祥事の発生を避ける措置をとるのは、指揮官の鉄則である。中支那方面軍司令部が上記のような注意事項を命じたのは、その危険性を熟知していたからである。中支那方面軍としては「城壁に日章旗を立つにとめ、部隊を城内に入れないように伝達する」と遵守を回答していた。

12/7、ところが12/7日現地着任した朝香宮鳩彦王中将上海派遣軍司令官は「たとえ中支那方面軍よりなんといわれるとも————南京攻撃の統制線のごときを墨守するに及ばず」と断言。

注意事項は空文化してしまった。

朝香宮鳩彦王中将は12/1日任命されたばかりで現地の実情を全く知らずして、自分の権限を犯されたと感情的になった判断を下した。その結果は歴史に長く著しい汚点として刻まれることになる。一人の非常識な判断、役割をわきまえない不慮がどんなに大きな影響を後世に遺すかを見事に知らしめるものである。この朝香宮鳩彦王中将を説得する者がいなかったことも（中間管理職不在）不幸なことであった。尤も上海派遣軍にも中支那方面軍にも法務部は無く、憲兵の数も少なく急ごしらえの補助憲兵（総計17名・入城した兵士は7万人）をもってしたのは「注意事項」の遵守は難しかったと考えられる構造的な問題でもある。日本軍兵士も疲れ果て、「南京一番乗り」とそそのかされ、厳寒下に防寒・露営装備も無いまま進軍をしてきた兵士（「殺戮者」「殺人鬼」と化しているのは分かっていた）がとる行為には参謀本部の責任が問われて当然である。

②中国側の対応

行き詰まっている中国軍は伝統的な「清野作戦」を挙行した。侵攻してくる日本軍の遮蔽物に使われる可能性のある建物をすべて焼却してしまうという焼野原作戦である。7日から9日にかけて中国軍は南京城壁の周囲1～2kmにある居住区域全域と南京城から半径16km以内にある道路沿いの村落と民家を強制的に焼き払った。住む家を失った近郊農民と城郭沿いに住んでいた市民が、城内の「南京安全区」（後述）に殺到した。これが不幸を増加させることになる。

この清野作戦は食糧を略奪し民家に宿営する日本軍が城外に留まることを困難にしまった。「注意事項」を守ることが出来ず、数万の飢えたる日本軍が城内駐屯せざるを得なくした。

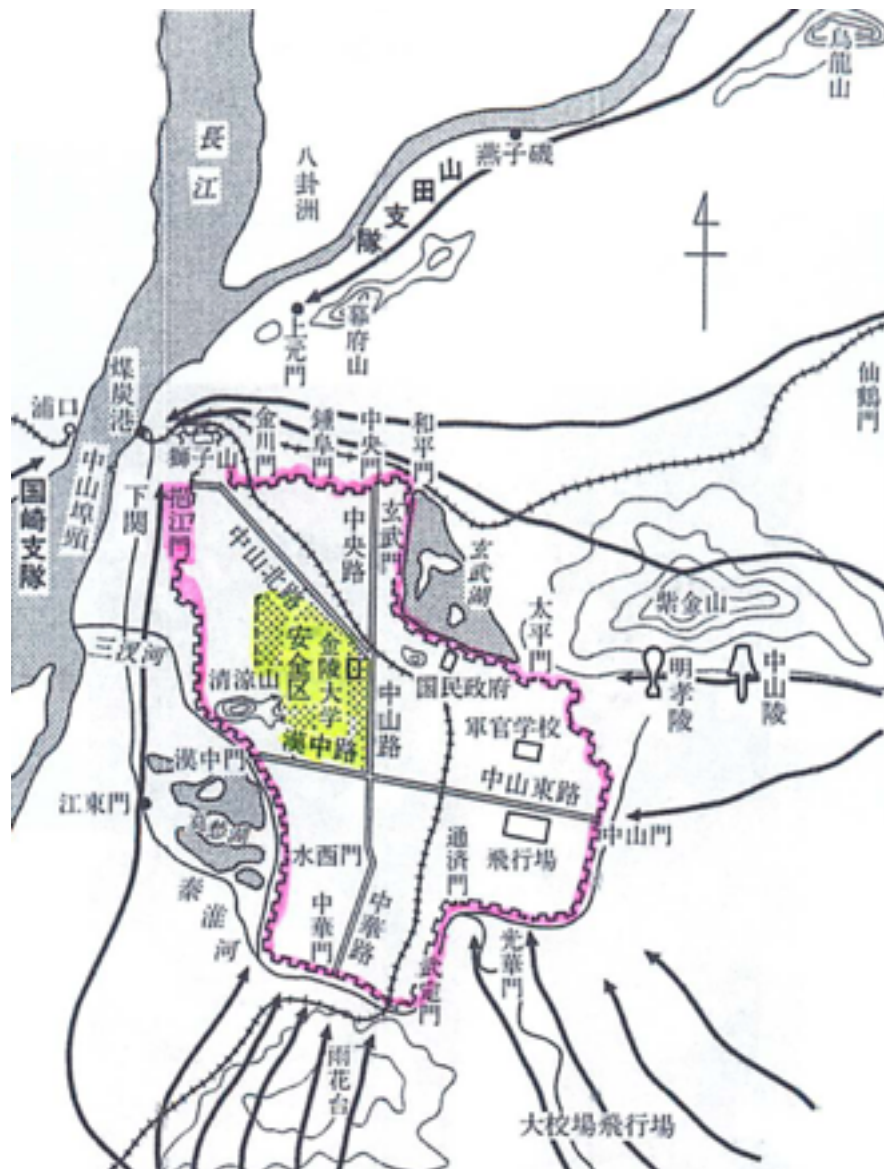
地図説明 ピンク線は城壁 黄色は国際委員安全区

南京城最後の攻略戦

12/8, 日本軍は南京城の包囲を完了

12/9, 松井根（大日本陸軍司令官）の名前「投降勧告文」日本軍機から城へ投下、中国軍答無し

12/10, 中軍、唐生智（南防衛軍司令長官）「死守の尽力せ。陣地放棄は厳に処す。長江の渡を厳禁」という京城と生死をとにする厳命をだた。背水の陣日本陸軍は「南城の攻略を続行城内を掃蕩すべし」の南京城総攻撃命令。海軍は海航空隊の爆撃を



石総でを内返 国京はよ罰江南もし 京しとを軍一

段と激化した。激戦は12日迄続くのであるが日本国内では日本国内では「南京陥落の捷報（良い知らせ）に祝賀の万歳わわき起こり、提灯行列がくりだされた。このラジオ・ニュースが現地に流れた頃12/11午後第6師団は南京城壁西側の湿地帯で小隊長2人を戦死させるほどの苦戦をしていた。このニュースを聞いて「誰がこんなデマを流すのか」と現地では不審があったが、現地の上層部（松井・武藤ライン）は国民の支持を取り付けること、反響が現場兵士を鼓舞することを狙って近い予想を発信していた。（現場記者の報道競争もあったが、報道規制のもとで自由に真実な報道はできなかった。

「感激の10日、脇坂部隊誉れの一番乗り」と報じられた脇坂隊は南京城にたどり着いてだけであり、その後は中国軍に逆に包囲され集中攻撃に遭い全滅に近い損失を出して、耐えていた。

故意の誤報は国民を踊らせ「提灯行列」「宮城前パレード」で兵士達を鼓舞したのである

予想通り、海軍航空隊の激しい爆撃も加わり、唐生智（南京防衛軍司令長官）が城内脱出を果たした

12/12、深夜、中支那方面軍は南京城を陥落させ、13日朝からは「残敵掃蕩」を開始した。この「残敵掃蕩」は「城内外の敵をあらゆる手段を用いて殲滅する。

（暴支膺懲）という命令で「注意事項」は無視された。

ラーベはこの様子を次のように記している。

「彼ら日本軍部隊は、脱走した囚人の群れの様に見えた」

彼らは南京にいたる進撃途中、沿道の村落を襲撃し、村民を殺害、女性を強姦・輪姦そして殺害し、食糧を略奪し、最後には放火するという残虐な行為を積み重ねてきた、中国軍憎しの敵愾心と狂気の戦場心理をもって残敵掃蕩のあたった。その斬殺の残忍さはここでは割愛する

12/12、パナイ号事件

この日の午前、中支那方面軍司令部から常州基地にいた海軍第二連合航空隊の司令部に電話がかかった「南京上流約18kmの揚子江上に中国の敗残兵を満載した商船約10隻が上流に向かって逃走中である。陸軍にはこの敵を攻撃する手段がないので、是非とも海軍航空部隊で攻撃してもらいたい。もしこの攻撃に成功するなら陸軍では感状に値することだ」この知らせで発進した指揮官は**村田重治大尉**で九六式艦上攻撃機3機（各機60kg爆弾6個搭載）ほか3名の指揮官で計24機であった。空は快晴で視界は50kmほどあり、地上はあまり風がないという気象状況であった。

アメリカの砲艦パナイ号はこの日の正午には日本軍の砲弾を避けて南京の上流約45kmの地点の長江の中州付近に投錨、停泊していた。パナイ号にはアメリカ大使館が

臨時に置かれていた。停泊位置は日本の外務大臣に伝えるようになっていが当該指揮官に伝わったのは午後5時半であった。

パナイ号が警護していたのはアメリカのスタンダード石油会社の商船とタンカーの美平号、美峡号美安号で全ての船は大型サイズのアメリカ国旗を幾つも掲げていた。その日は日曜日で乗組員たちは平常よりもゆるやかな休日の勤務態勢をとっていた。この船団を目がけて4名の指揮官かなる24機が順番に爆撃をしてパナイ号は沈没、タンカーの美平号のドラム缶は爆発してその後何時間のもわたって爆発音がつづいた。（極めて徹底した念入りの攻撃であった）

この詳細な経緯はアメリカ政府と国民に大きな衝撃を与え、対日感情は更に悪化することになった。アメリカではこの事件を「真珠湾攻撃への序曲」称している。日本側は誤射であると陳謝し賠償に応じたが、アメリカ側は誤射とは納得していない。その後の日米関係に与えた影響は大きい。この事件は日本海軍がアメリカ海軍に敵対したととらえられ、南京虐殺事件と合わせて対日感情を悪化させたばかりでなく、日本軍の残虐的行為に対するアメリカ国民の憤りが高まり、抗日・中国への支援活動が開始された。アメリカ国民の日本商品ボイコット運動が拡大するに伴い、それは対日経済制裁の要求にまで発展した。

アメリカ政府は日本の現地軍の独断専行や海軍航空隊の中国都市爆撃等を統制出来ない日本政府と軍部中央の指導力に対して不信を危機感を抱き「再び不意打ち」「奇襲攻撃」が行われる可能性を警戒して、アメリカ海軍航空兵力の軍備拡張政策を推進することになった。

アメリカ外交史研究者のウオルド・ハインリックスは「パナイ号撃沈事件はルーズベルト大統領らに対日経済制裁のような戦略思考を政策決定の全面に押し出す強烈な心理的衝撃をもたらした」と表している。パナイ号事件は日本の発表のように「円満解決」はしなかったことは間もなく現実の事となって現れるのである。

村田重治大尉はアメリカ向けに形式的は譴責処分とされたが実際は功績が評価され出世街道を進み「雷撃王」と賞賛され、真珠湾攻撃で「われ、敵主力を雷撃す。効果甚大」と真っ先に入電した指揮官で山本五十六司令官長より感状を授与されている。

12/14, 日本国内では、南京陥落祝賀の大提灯行列、帝都は旗、旗、旗の波」40万の市民が、マスコミの力で踊らされ、勝戦を煽らされていた。天皇は「お言葉」を下賜された。

「陸軍海軍幕僚長に賜りたる大元帥陛下御言葉

中支那方面の陸海軍諸部隊が上海付近の作戦に引き続き勇猛果敢なる追撃をおこない、首都南京を陥れたことは深く満足に思う。この旨将兵し申伝えよ」

天皇は戦争の拡大には何度も反対してきたにもかかわらず、命令違反の連続と統制無視で戦線を拡大してきた侵略行為を讃えたのは何故なのだろうか？一度ならずも。

一番喜んだのは松井石根司令官や武藤章参謀副長であった。下克上の統制無視をしても成果が上がれば報償を得る、「勝てば官軍」の伝統思想は続いていく。

その松井石根大将はこの日に、戦地から遠く離れた蘇州にいたが、12月17日に全軍入場式を挙行するといいだした。それまでに掃討作戦を終了せよということである。朝香宮上海派遣軍司令官は「それまでの掃蕩は無理である」と反論しても「頑として変更の意思なし」と拒絶された

ここに至ってもトップの争いが続いている。（詳細は割愛）

入場式のために更に厳しい「残敵大掃蕩」が命じられた。14日から17日にかけての、南京城内外で全軍あげての徹底した「残敵掃蕩・殲滅」作戦が遂行された。南京城区だけでなく再び近郊農村にまで苛酷な作戦が展開された。兵士と怪しまれたものは市民も殲滅された。若い男子の殆どが狩り出されて、靴づれのある者、頭に帽子の線跡がある者、極めて姿勢のよい者、背中に背囊の跡のある者、目つきの鋭い者は射殺された。その多くは軍に関係のないものであった。日本軍の発表で3日間で15000人を逮捕したがまだ25000人が市内に潜んでいると強調した。日本軍の捜査は風潰しで「便衣兵容疑者」（民間人の平服を着て銃を保持するゲリラ戦闘員）の捜索をしたので嫌疑のかかった一般市民も摘発され射殺された。

難民区に及んだ残敵掃蕩

①「南京難民区（安全区）国際委員会」が設立

11/17、「日本軍が南京に近づいて来る前に、城外に避難できない貧しい家の女性や子ども、その他の市民たちにとって安全と思える場所（安全センター又は安全区域）を設けたい」と提案したのはアメリカの宣教師ミニ・ヴォートリン女史であった。彼女の提案に賛同して南京に留まる事を決意したアメリカ人宣教師、教授、ドイツ人商社マン、デンマーク人、、イギリス人ら外国人15名によって「南京難民区（安全区）国際委員会」が設立された。委員長になったのはドイツ人ジョン・H・Dラーベである。「ドイツ人なら日本当局とうまく交渉ができる可能性がある」と思われたからだった。アメリカ大使館を通して日本と中国に通告した。。地図の通り南京城内の約8分の1、面積8.6km²キロ、東京都の中央区よりやや狭い面積に相当する

12月1日より、空襲が続く中難民受け入れの準備に奔走した。

②難民区の避難した人々

8日から難民収容が始まった。

たちまち数万人の難民が収容された。上海の戦域から避難してきた人たち、無錫や常州、くようなどの戦線から、進撃する日本軍に追い払われるようにして逃げ延びて来た難民、そして、中国軍による「清野作戦」で家を焼き払われた農民と市民達であった。最高時には約25万人が避難してきた。12日夜から中国の南京防衛軍の崩壊により撤退する機会を失った敗残兵が武器を捨てて、軍服を脱いで逃げ込んできた。

③難民区の掃蕩

12月14日日本軍は難民区一帯を虱潰しに敗残兵狩りをおこなった。「今日こそは草の根を分けても探し出し、亡き戦友の恨みを晴らしてやろうと意気こんで配置についた」日本軍の見積もりでは少なくとも5000~6000人と判断されていた。「片っ端から引っ張り出し裸にして持ち物を検査して、道路へ垂れ下がっている電線で引きくくり数珠つなぎにした」部屋に入れて焼き殺したり、銃殺した。(集団処刑) 入場式を翌日に控えた16日になると難民区周辺における「敗残兵狩り」は一層苛酷になった。民家に一軒一軒侵入し、徹底的に捜査し、隠れていた婦女子を発見すると強姦・輪姦行為をなし、証拠隠滅のため殺害した。この事件から自宅にいて恐怖にかられた婦人が何百人と街頭に逃げ出し安全な場所を求めて彷徨した。婦女子だけを収容した金陵女子文理学院のキャンパスは既に1万人近い難民で、渡り廊下まであふれて、足の踏み場もないほどにふくれあがっていた。開設責任者のミニ・ヴォートリン女史は、これらの女性を引き連れ金陵大学寮に保護した。

17日には1000件を超える強姦事件が発生したため、18日ミニ・ヴォートリン女史は再び500人を金陵大学寮に入れたが彼女達の寝る場所はなく露天で一夜を過ごした。発見された敗残兵の虐殺の仕方はここでは割愛する。

残酷である。日本側の担当某大佐の日記には「3日間で約6500を嚴重処分す」と記されている。殺戮されたのは過半が一般市民だったとラーベは実相を記し遺している。

長江沿岸の残敵処分

敗残兵狩りは城内だけではなく長江沿岸から近郊農村にもなされている。

近郊農村6県は3度目の日本軍の来襲である。(作戦は3度目であるがいずれも波状攻撃であるので、襲われた近郊農村6県は10回以上襲われた所もある) 日本軍の作戦は城内に至る門を一つを残して完全に閉鎖した。従って城外に出る門は下関

(シャーカン) に至る門だけであった。下関は長江と城壁に夾まれた所でそこに膨大な敗残兵や城外を脱出しようとする市民の群れが一斉に一挙に殺到し長江下流へと逃げ出した。その下流から日本軍が攻めてきたので絶体絶命の状態で大殺戮がな

された。16日「捕虜総数17025名、夕刻より軍命令により、捕虜の3分の1を江岸に引き出し射殺す。――中略――」別の部隊の日記では「に三日前捕虜せし支那兵の一部5000名を揚子江の沿岸に連れ出し機関銃をもって射殺す。その後銃剣にて思う存分に突き刺す――」揚子江担当の部隊は17日入場式の日も捕虜の始末で18日の日記「昨夜まで殺した捕虜は約2万人、揚子江に二カ所に山のように重なっているようだ。7時だが未だ片付け隊は帰ってこない。12月19日午前7時半整列にて清掃作業に行く。揚子江の現場に行き、折り重なる幾百の死骸に驚く。石油をかけ焼いたため悪臭はなはだし、――」二日間で揚子江に投げ捨てられた死体は約2万人であった。

近郊の農村

中国南京防衛軍の中で日本軍を正面突破を敢行したのは広東軍だけであったが、日本軍の警戒心は強まり、敗残兵狩りは南京近郊の6県の村々に及び、殺害、強姦、略奪、放火の残虐行為が繰り返された。近郊の農村の苦難はこの段階でも終わらない。もう一度残虐な災難が待っている

(3)12月18日から終結までの事件

南京入場式後に起きたこと

「未曾有の盛事・未曾有の惨事」

12月17日午後1時半、定刻、南京入場式が開始された。この式典には南京攻略戦に参加した全戦闘部隊の3分の1が代表部隊として入城した。残りは敗残兵狩り又は休養であった。。

「入場式というものは結局形式なんだろうが、結局は一種の自己陶醉、それも最高指揮官の独りよがりにはすぎないのかも知れない」（参加した少尉談）この式典の映像はネットでみれるが松井石根大将の勇姿がある。彼の命令と自己陶醉でどれだけの人が殺害され、残った日本兵の心の傷をつけてかは分からない。

10日間の休養・慰労期間が与えられた部隊も数多くあった。

この日には祝い酒が振る舞われた。列席出来なかった各部隊でも市内で徴発した酒類で乾杯して、それぞれの部隊でそれぞれの方式で祝宴がもたれた。この日の模様をイギリス人記者は「12月17日、金曜日。略奪・殺人・強姦はおとろえる様子もなく続き、ざっと計算しても、昨夜から今日の昼にかけて1000人の婦人が強姦され、ある気の毒な婦人は37回も強姦された。別の婦人は5ヶ月の赤ん坊を故意に窒息死させられ、野獣のような男が、彼女を強姦した。入場式後のマギー牧師の日記には強姦された11歳の少女を病院に連れて行く話。現場へ行った18人の少女を救急車に乗せ病院に保護する話等「まるでホラーの夢でも見ているようだが、目が覚

めるとそれが現実だった」と記している。酒に酔っ払って、凶暴化した兵士が強姦や殺傷を起こす場合が多く、彼らの残虐行為を止めに行くのは、命の危険がともなった。安全区国際委員たちは一人で二役も三役もこなしながら、日本兵と「たたかい」続けた。入場式前後から激増した強姦事件は1日1000件以上も発生し、最初の一週間で8000件以上の女性が犠牲になった。日本兵は金陵大学寮の女性も病院の看護婦も侵入し強姦した。神学院では白昼17名の兵士が一人の女性を輪姦した。年齢は少女から72歳と76歳になる老婆も含まれていた。10日間の休養期間には戦闘と全く関係のない、膨大な女性の身体と生命が犠牲にされた。ラーベは2万件とみているが、それも南京難民区国際委員会が掌握した事例だけである。難民区以外の更に広大な城外近郊区でおこなわれ多くの婦女子陵辱行為は記録も証言もする者もなく、歴史の闇にほおむりさらされた。(数は計り知れない)

第16師団に再び苛酷な命令

12/22、松井石根中支那方面軍司令官は海軍の水雷艇に便乗して南京をさり、上海に向かった。主力部隊も次々と南京を離れ次の戦地に赴いた。悲劇は再び上海派遣軍に第16師団に襲いかかってきた。残留部隊となったのである。第16師団こそ、華北戦線から上海戦に投入され、部隊の中でも冷遇され、南京攻略戦に駆り立てられ「南京一番乗り」を目指した部隊であった。南京城の攻防でも中国の最強の部隊と戦い多数の犠牲者を出したため、中国軍民にたいする倒錯した敵愾心が強く、又軍紀弛緩が著しい部隊でもあった。こんどこを祖国に帰れると思っていたのに戦線に残らされたため、あいかわらず虐殺・強姦・略奪・放火などの蛮行が続いた。師団長は佐々木到一少将に変わり城内肅正「土民に混ざる敗残兵を摘出して不穏分子を封殺する」ことになり、「査問工作」「兵民分離」が開始された。敗残兵が最も多く潜伏していると思われそのターゲットとなった。

日本の憲兵隊が市民を難民の登録を行い、身体検査をして民間人と判定した場合は「居住証明書」を交付した。ここでも露骨な背信行為がなされた。日本の将校が元兵士であることを自首した者には米と仕事を与えると説明したところ男子2—300名が名乗り出た(殆ど市民であった)夕方彼らは運河の堤防に連行され、そこで刺殺又は銃殺された。(背信行為は国際法違反であったが、日本軍には南京虐殺においてはいかなる国際法も無視された)

この工作は近郊農村6県にも及び又もや被害が加わった。江寧県では12月下旬、婦女10名が強姦され、陰部に鉄棒を刺し殺害されている。翌年1月に入り、避難中の村民100余人が殺害され、そのとき婦女が8名輪姦され、腹を割かれて殺害される交通の便のいい岔路村(タロムラ)は「女性狩り」のターゲット地区となり、頻繁に来襲、婦女250余名が強姦された後多くは殺害された。石馬村では女性20余名が

陵辱された後殺害された。曹村では3度に渡って日本軍部隊が来襲し、今回は50人が殺戮された。

その他の県にも被害は及んでいる。

1938/1/1、南京自治委員会を設立

上海派遣軍の肝いりで、傀儡組織の南京自治委員会の発表式が挙行された。

南京の日本軍には正月三日間の休暇が与えられ、難民区国際委員たちの背筋に再び鋭い恐怖の寒気が走った。。難民区の新年は強姦で始まった。委員達の格闘の日々が綴られて残っている。（割愛）

1月5日から日本軍による女子の難民、住民の登録が開始された。金陵女子文理学院と金城大学のキャンパスがその登録所となった。登録所では美形の婦人や少女が選びだされたという話しがあった（近郊農村であった）のでそれを警戒するために、マギー達は登録を最後まで見守った。幸いそのようなことはなかった。老婆が二人ビンタを食らったのを見ただけだった。

この日本軍の登録の結果、南京城内の住民は、難民区に20万人、その他の地域に5万人という数字が示された。

1月6日アメリカ大使館員3名が南京に上陸した。彼らの働きによって日本軍の蛮行が世界に発信され、外交ルートを通じて日本軍の不法行為を抗議することが可能になった。

1/15、大本営政府連絡会議において、国民政府との和平交渉（トラウトマン和平工作）の最終打ち切りを決定した。参謀本部はトラウトマン和平交渉を妥結させ、これ以上の拡大をしないで戦争終結を主張したが、近衛内閣、陸軍省、海軍省の反対多数で蒋介石国民政府を否定することになった。

1/16、近衛首相が「帝国政府は爾後国民政府を対手（あいて）とせず」という蒋介石国民政府を否定する政府声明を発表した。これは中国が屈服するまで戦争を拡大・継続していくという決定である。（近衛第三声明）

1/18、近衛首相は「帝国政府は爾後国民政府を対手（あいて）とせず」というのは同政府の否認よりも強いものである。これを抹殺せんとするものである」と補足的声明を出した。この政府と軍中央の決定は、日本国民を長期日中戦争の泥沼に引きずり込んでいく決定的な契機となった

1/22、第16師団が華北へ移動となった。代わって第11師団が進駐した。

1/24、アリソン事件発生

武装した日本兵が難民キャンプに侵入し、一人の女性を拉致、彼らが占拠して宿泊しているアメリカ人邸宅に連行して強姦した。二日後にアメリカ大使館員アリソン

が、日本の領事館警察と憲兵の同行のもと、被害女性をともなつて現場に調査に行ったところ、中から出てきた日本軍将校がアリソンに平手打ちをくわせるという事件を起こした。おそらく将校達はアメリカ人の記事発信に恨みを持っていたのであろう。アメリカでは外交官侮辱事件として大々的に報道された。日本政府はすぐに謝罪して賠償し、外交決着を付けてがアメリカ市民の日本への不信は収める事ができなかった。（パナイ号事件に続く対米敵視事件となった）

南京難民区（安全区）国際委員会の解散を要求

2月上旬、日本軍第11師団は南京の秩序が回復し、平常の市民活動が戻ったことを内外に印象づけるため難民区の閉鎖を命じた。難民区を追い立てられ自宅に戻った難民の女性を待っていたかのように、日本兵による強姦事件が頻発し、日に100件にもものぼる凄まじいものであった。強姦を拒否して刺殺された少女、強姦されている母親の傍らで泣き止まなかった幼児の口に布を入れて窒息死させる殺人行為。

2／14、大本営は中支那方面軍・上海派遣軍・第10軍の戦闘序列を解き、新たに中支那派遣軍の戦闘序列を下令した。司令官・畑俊六、参謀副長に武藤章が留任。

この留任はポイント

作戦としての南京攻略戦は終結したが、その後も強姦を中心とする日本軍の残虐行為は続いた。

2／18、南京安全区国際委員会は難民区を解消したいという日本当局の要請をうけて、名称を「南京国際救済委員会」に変更した。

3月に入ると南京城内における残虐行為は少なくなったが、近郊農村は依然として危険な状態が続いていた。2月中旬、アメリカ人宣教師が管理する難民キャンプ（郊外にあり1万人収容していた）の周辺では敗残兵狩りで男子は殺害され、女性は陵辱の被害が頻繁に発生した、金陵女子文理学院には3月に入って、南京難民区（この時の正確な名称は「南京国際救済委員会」）の話しを聞き知った農村の女性が500人余避難してきた。同じく500人余の男子が金陵大学寮に避難してきた。いったん減少していた金陵女子文理学院と金城大学キャンパスの避難民の数は3310名に増えた。

金陵大学付属病院である鼓楼病院（院長ウィルソン、彼も南京に留まって治療を続けた人）のもとには、新たに不幸な犠牲者が入院してきた。それは、南京城内の難民や住民の近くに長期駐屯した日本軍が婦女子を炊事婦・洗濯婦として拉致し、軟禁状態にして連日強姦・輪姦された人で悪性の病気をうつされ発病し放免された女性達であった。日本兵宿舎に拉致され8日間にわたり毎日7回から10回強姦されあらゆる種類の病気をうつされ放免された女性らがいた。中には28日間拉致拘留さ

れ毎日10回から20回の割合で強姦された病気になった人もやってきた。そして、更なる不幸は長期にわたって何回も犯されたため、妊娠してしまった女性も多かった。強姦された女性の10人に一人は妊娠していた。彼女たちは自殺の道を選ぶ者も少なくなかった。生まれた子どもは例外なく溺死や窒息死となった。ハーフが育てられることはなかった。

中華民国維新政府の成立

3/28、中支那派遣軍の工作による中華民国維新政府が南京に成立した（南京自治委員会は解散）治安もほぼ回復し、安全区の難民も自宅に戻り始めた。ここにおいて南京事件は一応終焉した。

金陵女子文理学院に残った孤児や寡婦を追い出すことができなかつたミニー・ヴォートリン女史（宣教師）は職業技術訓練クラス・基礎教育クラスを発足させ、社会復帰を支援した。夏にはまだ800人を越える人がここで生活をしていた。金陵女子文理学院が成都へ全面移転したが彼女だけは残って職業訓練クラスの運営を維持した。

然し、苛酷で悲惨な毎日、人間の残忍さと戦ってきた彼女を病魔が襲った「心的外傷後ストレス障害（PTSD）」無力感に捕らわれるようになり、9月には欧州大戦の勃発によって戦争のもたらす人類の悲劇がいつそう拡大したことが彼女をいよいよ絶望的にさせ、精神錯乱の発作にときどき見舞われるようになり、1940年5月にアメリカに帰った。翌年5月自ら命を絶った。

ミニー・ヴォートリン女史（宣教師）と南京安全区国際委員会については次号で所見を述べます

要約

南京大虐殺事件は日本の陸軍と海軍が南京攻略と占領を通じて中国の軍人及び民間人に対して行った戦時国際法と国際人道法に反した不法残虐行為の総体である。事件の区域は南京城内のみならず近郊6県を含む南京特別市全域を含む地域で行われた。

時期1937年8月15日から開始された海軍機の無差別空爆撃が前哨線であり、陸軍の中支那方面軍が南京選区に突入した1937年12月4日前後から地上戦で本格化し翌年3月28日中華民国維新政府の成立時と考えられる。

南京攻略戦は先ず海軍航空部隊が4ヶ月にわたる南京空爆作戦を実施し、空からの攻撃により中国政府側の物質的・精神的抵抗力を破壊し、「敵の戦意を消滅」させ

ておいて、最後に地上から陸上部隊が侵攻、南京城内に突入、占領するという、世界における戦略爆撃の初期の理論を本格的に実施したものである。

本稿では関東軍の活動は記すことができなかつたが1937年12月31日現在の日本軍の侵攻戦況状況は次の通りである

①内蒙古の東南部

察哈爾省の南部と綏遠省の大部分を占拠した。

②華北

河北省、山西省北部、山東省及び河南省の黄河以北の要地の殆どを占拠した。

11/27、河南省の彰徳に「河南自治政府」を創設した

12/11、山西省の太原に「山西自治政府」を創設した

河北省の南部と山東省の北部に「治安維持会」を設立した。

12/14、北京で「中華民國臨時政府」の樹立を宣言させた。

③華中・華南は、ごく一部であるが本稿の通り

おわりに（私見）

ここまで纏めるのに随分苦労しましたが、ここで特に考えさせられることは、日本は「戦争をやめることができなかつた」二度のチャンスを生かすことが出来なかつたという事実です。「それでも日本人は戦争を選んだ」（加藤陽子著）を理解するために始めた試みですが「人々は何故戦争をするのか？」という原初的な疑問を追うようになりました。「組織人としてそうせざるを得なかつた」に結びつく組織論と「責任を執らない個人」の影響力の大きさ、特に指導者の影響力の大きさは、組織論を覆すものがあると思います。私たちの日常では、国家や会社組織の中で個人の無力さを感じますが、「否と然り」を明確にすることの大切さを痛感します。本稿から感じるのですが、陸軍は早期停戦を基本的に考えていたと思われまふ。それには石原完爾の考えが影響しています。満州事変では拡大派の先鋒であつた彼がその失敗を自認し学び直したのでしょう。一転不拡大になつたのは「ソ連への脅威」でした。又彼は日本は最終戦をアメリカと戦うと分析してしまつたから、海軍の山本五十六にも大きな影響を与えたと私は考えています。山本五十六はその考えを組織化し航空機の開発に注力します。海軍は上海・南京戦を開発した飛行機と操縦技術の検証のために利用しました。

アメリカに留学経験のある山本五十六はアメリカの豊富な資源と戦力を見てどのようにすれば日本が勝てるかを真剣に考えたと思います。負けることを知りながら止めることが出来なかつたのは何故だろうかという疑問があります。次回はこのことも記す予定です。

本稿ではマスコミの持つ影響力については殆ど触れることが出来ませんでした。言論統制は「故意の誤報」で国民を踊らさせたとの程度にとどまりましたが、言論の自由は民主主義の基本です。

海軍はこの上海～南京戦で何故繰り返して対米敵視事件を引き起こしたのでしょうか。パナイ号事件にしてもアリソン事件にしても処罰は形式的で実質は誉れを与えて、米国の不信感を煽り経済制裁の芽を播いてしまいました。石原完爾の影響から抜けきれなかったのかと疑問を持ちます。2・26事件で一掃された陸軍の皇軍派の退役将校が叶えられなかった策、それは個人の恨みにすぎないことを海軍に托したような動きも見られます。

陸軍、海軍のみならず国民に共通していたのは中国への侮辱感をともなった蔑視であったと思います。これは日清戦争の頃から養われたものです。「暴支膺懲」が戦争の目的になるのですから、国民感情としては「恨みをはらす為に懲らしめる」ことになってしまいます。戦場に出る兵士には皇軍教育がなされるので、更にその考えは強化され、戦地で同胞が殺されるのを直視すれば、益々その感情は高まります。教育の大切だが思い知らされます。

日本も中国もこれだけの犠牲を払っても戦争を止めることが出来ませんでした。中国には毛沢東の戦略があつてソ連のみならず英米を味方に付けることで勝戦の機会を待っていました。資源の乏しい日本は、外交交渉によらず、戦争で資源国を勝ち取ることを目指して進軍していくわけです。結論の分かっている歴史研究ですがリーダーシップの観点や組織論の観点からも多くの学びが得られます。そして、人間についての深い洞察が可能になるように思い、学びを続けます。

引用参考文献

- | | | |
|----------|---------------------|--------|
| 山中 恒著 | 「アジア・太平洋戦争史（下） | 岩波現代文庫 |
| 笠原十九司著 | 「南京事件」 | 岩波新書 |
| 笠原十九司著 | 「南京難民区の百日」 | 岩波書店 |
| 笠原十九司著 | 「海軍の日中戦争」 | 平凡社 |
| 本多勝一著 | 「南京への道」 | 朝日新聞社 |
| 堀田善衛著 | 「時間」 | 新潮文庫 |
| 半藤一利著 | 『昭和史』1926-1945 | 平凡社 |
| 図説・日本史通覧 | | 帝国書院 |
| 太平洋戦争の記憶 | エリック・デュシュマン編集 | |
| | アシェット・コレクションズ・ジャパン刊 | |

参考文献

- | | | |
|---------|---------------|-------|
| 東中野修道編著 | 「1937南京攻略の真実」 | 小学館文庫 |
|---------|---------------|-------|

末尾資料1 軍隊編成表

軍隊編成表

シンボル	名称	人数	従属部隊	指揮官
XXXXXX	総軍	多数	複数の師団以上の部隊	元帥から大将
XXXXX	軍集団		2以上の軍	元帥から大将
XXXX	軍	50,000から60,000ないしはそれ以上	2以上の軍団又は師団	元帥から中将
XXX	軍団	30,000以上	2以上の師団	大将又は中将
XX	師団	10,000から20,000	2から4の旅団又は連隊	中将又は少将
X	旅団	2,000から5,000	2以上の連隊又は大隊	少将又は准将又は大佐
III	連隊	500から5,000	1以上の大隊又は複数の中隊	大佐又は中佐
II	大隊	300から1,000	2から6の中隊	中佐又は少佐
I	中隊	60から250	2以上の小隊	少佐から大尉
...	小隊	30から60	2以上の分隊	中尉から軍曹
..又は.	分隊 (又は班)	8から12	なし。複数の組に分けられる場合もある	軍曹から兵長
Ø	班 (又は組)	4から6	なし。複数の組に分けられる場合もある	伍長から一等兵
なし	組	1から6	なし	伍長から一等兵

小隊または中隊より上の単位は、「司令部」または「本部」と呼ばれる指揮専門の小単位を編制内に有することが多い。また、歩兵部隊の場合は、歩兵連隊の「歩兵砲中隊」のような火力支援担当の小単位を有することが多い。

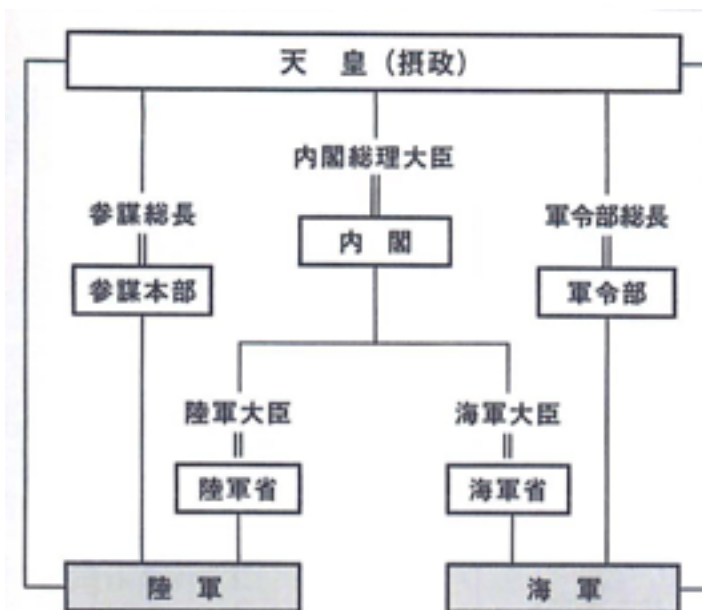
末尾資料2

天皇と軍の関係

陸軍は参謀本部と陸軍省から成る
海軍は軍令部と海軍省から成る

1937年当時は陸海軍大臣は現役の軍人に限られた。

閣議は全員一致でなければならない
一人でも大臣が反対すれば内閣は総辞職となる





東京朝日新聞

朝刊
第一

本紙	一月	二角
半年	一元	六角
一年	一元八角	一元二角
廣告	別表	
印刷	代金	
送付	代金	
電話	二六三三	
社址	東京市丸の内	
支店	大阪、名古屋、神戶、東京、横濱、京都、福岡、仙台、札幌	

一齊

歴史に刻

南京城門

城内

【十一日午前一時大本營陸軍部發表】軍の一部は
日章旗を翻へせり

【上海特電十日發】上海軍午後七時發見！松井最高指揮官の情
報は機密を實行するに決し砲兵の全力を以て砲撃を開始する
し且下城内を掃蕩中なり

【上海特電十日發】南京城の敵は投降勧告に應ずる色なく十日
我方はついに武力を行使するに決し、午後一時午一齊に砲撃の
あげて城内に向つて砲撃を接びず全線一齊に進軍を開始、同夕刻
城門は太平門、中出門、先軍門、通濟門、武定門、中興門、水

脇坂部隊決

時間に
注目

末尾資料 3 1937年12月11日 東京朝日新聞

大本營発表が11日午前1時となっているところに注意。本文記事参照
この時間は未だ戦闘中で脇坂部隊は中国軍に包囲されていた。
現地司令部の「故意の誤報」と言われている

末尾資料4 日華事変年表

1 日中戦争の始まり		→ p. 20 登頭地図	
内閣	年	日本と中国・アジア	日本と欧米
弘毅・田中	1936 (昭11)	12.12 西安事件(→国共停戦成立) ⊕ p.269	11.25 日独防共協定調印 12.31 ワシントン海軍軍縮条約失効
		1937 7.7 盧溝橋事件(日中戦争へ)→① 8.13 第2次上海事変→② 9.23 第2次国共合作成立(抗日民族統一戦線結成) 12.1 国民政府、重慶に移転→③ 12.13 日本軍、南京を占領(南京事件が起きる)→④	11 日独伊三国防共協定調印  ③現在の盧溝橋
近衛文麿①	1938 (昭13)	1.16 第1次近衛声明 「国民政府を相手とせず」とし、交渉による平和の道を閉ざす	7.29~8.10 張鼓峰事件→⑤  ④南京事件の石碑
		10 日本軍、広東、武漢三鎮(漢口・武昌・漢陽)占領 11.3 第2次近衛声明 日本の戦争目的は「日・満・華三国の提携による東亞新秩序建設にある」 12.20 汪兆銘、重慶を脱出しハノイへ(30日に対日和平声明) 12.22 第3次近衛声明 日本と中華民国との提携の原則は「善隣友好、共同防共、経済提携にある」 ⑤近衛文麿	
平沼・磯谷	1939 (昭14)	2.10 日本軍、海南島に上陸 6.14 日本軍、天津の英仏租界を封鎖	5.12 ノモンハン事件(~9月)→⑥ 7.26 米、日米通商航海条約廃棄を通告
			9.3 独軍のポーランド侵攻(1日)に対し、英仏が対独宣戦を布告→第二次世界大戦勃発
近衛②	1940 (昭15)	3.30 汪兆銘、南京に新国民政府樹立→⑦ 9.23 日本軍、北部仏印進駐→⑧ 11.30 汪政権と日華基本条約を調印	9.27 日独伊三国同盟調印 ⊕ p.279 4.13 日ソ中立条約調印 ⊕ p.279 4.16 日米交渉を開始(野村吉三郎大使・ハル國務長官)
		1941 (昭16) 7.28 日本軍、南部仏印進駐 9.6 帝国国策遂行要領を決定	7.25 米、在米日本資産を凍結 8.1 米、対日石油輸出を全面禁止
東条英機		12.1 御前会議で対米英蘭開戦を決定 12.8 日本軍、マレー半島へ上陸 ⊕ p.280	11.26 米、ハル=ノートを提出 ⊕ p.279 12.8 日本軍、真珠湾奇襲攻撃 対米英宣戦布告 ⊕ p.280